

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

学校や仕事、家庭など、僕たちは日常生活のさまざまな場面で、日々信念の対立に遭遇^①する。「俺の考えは絶対に正しい、お前は絶対にまちがっている！」……そんなことを、僕たちはしばしば口にしてしまうことがある。

でも、この世に絶対に正しい信念なんてものはない。

そう、僕たちの信念は、実は何らかの欲望や関心によって編み上げられたものなのだ。

(a)、学校は子どもたちをびしと統率^②しなければならないと考える親や教師がいる。その一方で、学校は子どもたち一人ひとりの自由や自主性をできるだけ尊重しなければならないと考える人たちがいる。

異なる信念を持つ両者は、時に激しく対立することがある。

でも、この信念の次元で対立をつづけているかぎり、両者が理解し合うことはひどくむずかしい。「自分こそが正しい、お前はまちがっている」。そんな信念のぶつけ合いに、多くの場合終始することになるだろう。

そんな時に重要なのは、どちらの信念が絶対に正しいかと考えるのをまずやめることだ。そしてお互いの信念が、いったいどのような欲望や関心から編み上げられたのか、互いに吟味^③することだ。

たとえば、集団統率をよしとする教師は、かつて学級崩壊に苦しんで、そんな経験はもう一度とごめんだと思っているのかもしれない。だから統率力を発揮^④して、子どもたちをまとめ上げ、校長や保護者たちからその指導力を認められたいという欲望を持っているのかもしれない。

他方、子どもたちの自由や自主性を尊重すべしと考える人は、子どもの頃集団統率的なクラスになじめず、孤独な思いを抱えた経験があるのかもしれない。だからそんな疎外感^⑤を、今の子どもたちに味わせたくないという欲望があるのかもしれない。

もともと、本当に学級崩壊の経験が集団統率への欲望を抱かせたのか、あるいは、集団統率の苦しい経験が自由尊重の欲望を生み出したのか、その真相は究極的には分からない。過去の経験と僕たちの欲望との因果関係^⑥は、厳密には「たしかめ不可能」なものなのだ。

(b)、集団統率の欲望であれ、自由尊重の欲望であれ、僕たちがそうした欲望を抱いているのだとするならば、その欲望自体を疑うことはできない。

ここで重要なのは、僕たちの信念は実は欲望の別名だということだ。

信念対立の現場において、僕たちはそのことを十分に理解し合う必要がある。そうすれば、「なるほどね、あなたがそういう欲望を持っているということについては、まあ分からなくもないよ」と、お互いに一定の理解を示し合えるようになるだろう。

信念の次元で議論をし合うかぎり、僕たちは互いに一歩も引けなくなることがある。でも欲望の次元で対話をすれば、僕らは相手の欲望を理解しようとすることができるようになる。少なくとも、その可能性を開くことができるようになる。

(c)、だからといってすぐにお互い共感し合ったり納得し合えたりするわけじゃないだろう。でもその理解への意志は、対立を乗り越えるためのささやかな一歩になるはずなのだ。

(d) 次に重要なのは、お互いのそうした欲望や関心が、本当に妥当かどうか吟味^⑦することだ。

「自分の統率力を認めさせたい」という欲望は、本当に子どもたちのためになっているといえるのか？「孤独を感じさせたくない」という思いは、本当は独りよがりな欲望にすぎないんじゃないか？といった具合だ。

そうやってお互いの欲望の妥当性をたしかめ合いながら、僕たちは、徐々にお互いが納得し合える「共通関心」へと思考を向かわせる必要がある。独りよがりな欲望・関心じゃなく、どちらも共有できる、もつと深い欲望・関心を考え

合うのだ。

たとえば、自由尊重派の教師のみならず、集団統率派の教師も、子どもたちにはゆくゆくは自由に、つまり生きたいように生きられるようになってほしいという関心なら、きつと共有できるにちがいない。

でもだからといって、子どもたちのわがままな自由を、今教室でそのまま認めるわけにはいかない。そのような関心もまた、両者は共有できるにちがいない。

僕たちが自由に生きるためには、他者の自由もまた認めることができなければならない。哲学ではこれを「自由の相互承認」の原理と呼んでいる。

この原理の重要性を、両者はきつと「共通関心」として持つことができるはずだ。

とすれば、僕たちは「集団統率か、自由尊重か？」といった対立をつづけるのではなく、子どもたちのゆくゆく自由と、その「相互承認」を旨むという「共通関心」を、どうすれば実現することができるのか、共に考えていけるようになる。

信念対立は、その時対立から協同へとひっくり返るのだ。

もちろん、実際の信念対立の現場では、とりわけ感情が邪魔をして、事はそう簡単には進まないだろう。でも、もし僕たちが本気で対立を乗り越えたいと思うなら、こんなふうにお互いの欲望・関心の次元にまでさかのぼり、その上で、お互いが納得できる共通関心と、それを叶えるためのよりよい第三のアイデアを見出し合っていくなさな。

(吉野一徳『はじめての哲学的思考』による。一部改変)

問一 二重傍線部①～⑤の漢字の読みを書きなさい。

問二 空欄 (a) ～ (d) に入る語として最も適当なものをそれぞれア～エから選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|
| a | ア もしも | イ それでも | ウ そして | エ たとえば |
| b | ア でも | イ むしろ | ウ たとえば | エ だから |
| c | ア あるいは | イ しかも | ウ もちろん | エ たとえ |
| d | ア たとえば | イ そこで | ウ それとも | エ でも |

問三 波線部①～③の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれア～エから選び、符号で答えなさい。

- | | | |
|---------|-------------------------------|-----------------------|
| ① 吟味する | ア じっくりと味わう | イ おおいにただえ合う |
| | ウ よく調べ確かめる | エ 納得するまで話し合う |
| ② 因果関係 | ア ある事柄が別の事柄を引き起こしているということ | |
| | イ ある事柄が別の事柄と同時に起こっているということ | |
| | ウ ある事柄が別の事柄と無関係に起こっているということ | |
| | エ ある事柄が別の事柄を起こさないようにしているということ | |
| ③ 独りよがり | ア 自分だけが被害者だと思っていること | イ 自分だけが認められたいと思っていること |
| | ウ 自分だけに厳しいということ | エ 自分だけで正しいと思っていること |

問四 傍線部 A「そのこと」の指す内容を、本文中から二十字で抜き出しなさい。

問五 傍線部 B「『自由の相互承認』の原理」とあるが、どのような原理か。本文中の言葉を使って、五十文字以内で書きなさい。(句読点も字数に含む)

問六 次の文章は、筆者が、信念の対立を乗り越え、新たなアイデアを出していくために必要な思考のステップをまとめたものである。解答欄の文の前後に続くように、空欄（ア）～（ウ）に入る言葉を、本文中より抜き出しなさい。

対立する意見の底にある、それぞれの「（ア）・（イ）」を自覚的にさかのぼり明らかにする。

お互いに納得できる「（ウ）」を見出す。

この「（ウ）」を満たしうる、建設的な第三のアイデアを考え合う。

二 次の問いに答えなさい。

問一 ①～⑩の傍線部のカタカナにあてはまる漢字を、それぞれア～オから選び、符号で答えなさい。

① イノシシの符リヨウ期間は法律で定められている。

② 丘の上にはリヨウ養施設の建設が予定されている。

（ア 料 イ 陵 ウ 猟 エ 療 オ 糧）

③ 対戦相手はケン実な守備を誇るチームだ。

④ 大きい損害のないうちに撤退するのがケン明である。

⑤ 体調のすぐれない父は本日、精密ケン査を受ける。

（ア 俟 イ 賢 ウ 件 エ 堅 オ 検）

⑥ 彼の打球は美しいコを描いた。

⑦ 長年の愛コに感謝いたします。

（ア 弧 イ 雇 ウ 枯 エ 顧 オ 固）

⑧ 今日は早めに夕食をスませた。

⑨ 庭で転んでひざをスリむいた。

⑩ 年賀状をスる時期になった。

（ア 刷 イ 住 ウ 済 エ 擦 オ 澄）

問一 [1] 〃 [5] に入る漢字を下段の説明文を参考にして、ア～コから選び、符号で答えなさい。

誇大 [1]	ありもしないことを大げさに考え信じること
[2] 知新	古いものをたずね求めて新たな事柄の意味を知ること
清廉 [3]	行いが清く後ろめたいところがないこと
[4] 転倒	根本的で重要なことと、そうでないことを取り違えること
感慨 [5]	いい表わせないほど心に深く感じ入ること

ア 温故	イ 温厚	ウ 潔白	エ 広告	オ 主客
カ 純白	キ 本末	ク 無常	ケ 無量	コ 妄想

問二 上段の読みを参考にして、一部分が書かれている漢字を完成させなさい。

① さそう	三口 う	② わたる	い る	③ せまる	え る
④ つむぐ	糸 ぐ	⑤ ささむ	叫 む		